

## 「連携」の困難性について（2）

鍛治谷 静\*

## Difficulties of Cooperating with Relevant Institutions (2)

Shizuka Kajiya

連携の困難性を、専門職であっても心（感情）をもった一個の人間であるという視点から検討した。連携という相互関係を通して、専門職個人にはさまざまな感情—援助対象者をめぐって、連携相手・機関に対して、自身の専門性に対して等—が去来する。そうした個人の感情は連携を阻害する要因になりうることを複数の先行研究や筆者の授業実践報告は示している。中でも本人が気づきにくい（意識されない）感情の問題をどう乗り越えるのかについて、精神分析の逆転移の概念を援用し論じた。すなわち、自身の内面だけでなく自身の外側で生じた「できごと」を観察・記録し、他者と話し合うといった地道な作業が自己理解につながると考えられた。

**Key words:** 連携、困難性、逆転移、自己理解、できごと

はじめに

筆者は前稿<sup>i</sup>で、援助の現場でニーズは高いものの専門・関係機関の「連携」が円滑に進んでいない実態を検討するにあたり、そもそも立場や専門の異なる者（機関）同士の連携は前提として“困難性”を抱えているという田中の指摘<sup>ii</sup>に注目した。そしてその困難性が具体的にはどのような形で立ち現れるのか、先行研究で提示された事例を複数読み解き、その対応について実務レベルから考察した。

本稿では引き続き、連携の困難性を専門職であっても心（感情）をもった一個の人間であるという視点から検討する。専門・関係機関の組織同士の連携といえども、実際は個々人による相互的なやりとりの集積である。やりとりを重ねる中で、個人にはさまざまな感情—援助対象者をめぐって、連携相手・機関に対して、自身の専門性に対して等—が去来する。仕事だからといって、専門職だからといって、どのような営為も感情の影響から逃れることはできない。つまり、個人の心（感情）の状態は、われわれが日々営む生活場面と同様に連携の行方を少なからず左右することは容易に想

像がつく。

河合<sup>iii</sup>は、専門職の連携において最も留意すべきは「治療者相互間逆転移」であると述べている。逆転移とは精神分析の用語であり、治療者が患者に向けるさまざまな感情を説明する概念であるが、「その本質はそもそも無意識のもので」<sup>iv</sup>ある。河合は専門職が他の専門職に対していただく感情についても「逆転移」と呼び、チームワークを乱し事態を混乱させるとして注意を喚起している。当事者がそれと気づきにくいからである。筆者も、連携におけるこの「逆転移」すなわちはっきりと意識にのぼらない（が存在する）個人の感情の問題を、“連携の困難性”の一つとして取り上げ検討する必要があると考えた。

本稿では、専門職の間でどのような感情の問題が生じやすいと考えられるか、また逆転移という「意識されない」困難性の乗り越えをどう図るべきか検討する。

## I 先行研究事例から

連携に影響を与える要因として、専門職個人の感情に言及した研究を見ていく。

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

例えば山中 v は、HIV 感染症医療における多職種間「連携」をテーマに、医師の様々な意識および経験とカウンセラーへの援助要請行動の関係を調査した結果から、連携を求める行動が援助者自身の限界の認識と関連があることを明らかにした。「援助者自身の限界の認識」は連携形成を促進する要因になる一方で、「すでに組織内や地域内で権威や地位を獲得している援助者の場合、連携の一步を踏み出すことが自分の権威や地位を揺るがすのではないかとの恐れを抱き」、連携形成を阻害する要因として作用する可能性があるとして述べている。

また、栄 vi らは、精神障害者退院促進支援事業における連携の促進要因および阻害要因を明らかにするために保健所等の関係者（専門職）に対し半構造化面接を行った。連携における阻害要因として、ある関係者は「感情のもつれ」と表現し、「相手ばかり言いたいことを言って、こっちのことは聞いてくれないとか、わかってくれないみたいなふうになると、マイナスになっていく…」と語った。この語りから機関間の相互尊重・相互理解の欠如が見い出され、それにより「個々人の不全感や不公平感」が生じ連携が阻害されるとした。

さらに土田 vii は、療育・保育施設の保育士と教員の支援の引き継ぎを行う自閉症児の就学支援場面を社会学的手法で分析した。一例として、就学支援のための会議で、ある教員が「(支援の引き継ぎが) 必要とは思う、だけど前の人と同じにできない。比較されて苦しくなることもある」と保育士からの要望には拒否的な態度を示しつつも「生活支援の具体的なこと (の情報が欲しい)」と発言した。この発言は保育士の期待や要望から外れており連携を進める上でのコンフリクトを生じさせたが、発言の背景には教員の「経験の少なさ、不安感」が表れていると指摘している。

以上の研究で注目したいのは、「自分の権威や地位を揺るがすのではないかとの恐れ」「個々人の不全感や不公平感」「不安感」は、研究者という他者によって推察されたり見立てられたり名付けられたりした、個人の内面の状態であるということである。つまり、それらの感情に個人“本人”がどこまで自覚的であるのか、意識にのぼらせているのかまでは分からないのである。おそらく、山中の推察する「自分の権威や地位を揺るがすのではないかとの恐れ」などは、たとえ指摘されたとして

も本人はその存在を否定するのではないだろうか。本人にとっては受け容れがたい感情と思われるからである。連携を阻害している要因がそれとは思ってもよらない場合、本人がその要因を取り除いて軌道修正するといった的確な手立てはとれない。

また、栄の研究にあった「感情のもつれ」との表現は、その個人本人でさえも捉えがたく処理しがたいといった、まさに逆転移の特徴を端的に表しているように思われる。糸玉がくずれてもつれてしまった糸は、下手に解こうとするとかえってもつれてしまうものである。あちこちを引っ張るうちにどこがどう絡まっているのか、まったく見えない状態になる。しまいには、もつれた糸を「切る」ことでしか使用可能な状態に戻せなくなってしまう。人と人のもつれでいうと、「切る」はすなわち関係の破綻・連携の失敗となる。

したがって、専門職の連携スキルとしては自身の内面の状態につねに自覚的であること、「もつれた糸の結び目を見つけて上手に解す方法」を身につけることが求められようが、実際そのような身の処し方が容易でないことをわれわれは経験的に知っている。

## II 専門職養成課程の授業事例から

保育の現場でも連携の必要性は強調されており、養成段階から連携について学んでおくのは意味があると考えている。筆者は、短期大学保育者養成課程 2 年次後期の教職実践演習の授業のうちの 1 回を「専門職間の連携」に充てている。その授業の目的と方法、ある年度の学生の反応について以下に述べる。

特別支援教育の導入もあって障害の早期発見・早期療育の流れが進み、昨今の保育現場では「診断書」を携えて入園 (所) してくる子どもや、療育施設と並行通園する子どもに出会うことが珍しくない。一方で学生は障害児教育や臨床心理学などで特別なニーズのある子どもたちへの支援を学んではいるが、多岐にわたる診断名をはじめとする医学的な専門用語、複雑な福祉サービスの仕組みと教育行政の関係等に苦手意識を抱く者が少なくない。さらに、難しい子育てに悩む保護者を支援するなど自分には到底できそうもないと端から

匙をなげてしまう学生もいる。もちろん全員ではないが、学生たちが特別支援を保育とはまったく異質でまさに“特別で”難しい専門領域としてとらえている印象があった。つまり、学生と医療機関や療育施設等の“専門機関”の間に心理的距離があるように感じられていた。

そうした筆者の日常的な課題意識をもとに、授業では筆者が作成した架空事例とその事例に関する問いを学生に提示し、連携における感情の問題についてまずは心理的距離に気づきを促すことを目的とした。なお、問いに対する回答は「正解・不正解の別はないこと」「成績評価に影響しないこと」「率直な心情に即して答えること」を事前に説明・指示し、個別のプリントに記入させた後、挙手で答えさせた。そのうち数名を指名し、それぞれ意見を述べさせた。

#### 【事例】

広汎性発達障害の診断が出ているAが、2年保育で幼稚園に入園してきた。保護者は、Aの発達検査の結果や主治医の所見等を幼稚園に提出し、担任教諭にも「よく読んでおいてください」と同じ書類のコピーを手渡した。Aは入園後も週2回、幼稚園を休んで主治医のいる病院のデイサービスで訓練（療育）を受け、保護者も月1回のカウンセリングを継続することになっていた。入園して1ヶ月たったが、Aは母親と別れる時まだ大声で泣いて母親から離れられない日が続いている。母親は、「訓練の日は泣いたことがないのにねえ…」とAや担任教諭を責めるふうでもなくつぶやいた。

#### 【問い】

もし、あなたがAの担任教諭だとしたら、この時の心情は次のうちどれに近いか。

- 〔1〕 母子関係に問題があるのでは。
- 〔2〕 週に2日も休んでいたら、なかなか慣れないのは当たり前よ。
- 〔3〕 専門的な訓練（療育）を受けることができているのだから、幼稚園で特別なことは何もしなくてもいいし、嫌なら休んでもいいのでは？
- 〔4〕 担任として私がダメだからAは泣くのかも。母親もきっと私よりもカウンセラーを信頼しているのだろう。（自信をなくす）
- 〔5〕 その他

以上の同じ授業を3クラスで行った。受講学生数は3クラス合計で63名であった。問いに対する回答結果は、〔4〕を選んだ学生が24名と最多で全体の4割近くを占めた。その中には「とにかくショック」「自信を失ってしまい、どうしたらいいか考えられなくなる」等と強い感情反応を示した学生もいた。さすがに〔3〕の連携どころか療育機関と幼稚園の役割・目的の違いさえ理解できていないような回答を選んだ学生はほとんどいなかった（2名）が、幼稚園と並行して療育に通うことに対するネガティブな意識の表明とも読める〔2〕を選んだ学生は13名だった。〔1〕は4名、無回答は7名であった。一方、〔1〕～〔4〕のどれにもあてはまらない〔5〕と答えた学生は13名であった。彼らに具体的な内容をたずねると、「療育機関ではAにどのような接し方をしているのか、くわしく知りたいと思う」「Aの好きなものや興味のもてるものは何か母親や療育の先生に聞き、Aが少しでも安心できる環境づくりを考えたい」等の答えが返ってきた。模範的といえそうな回答であったが、後から「それでもやっぱり、母親からそんなつぶやきが漏れ聞こえてきたら、最初はショックを受けると思う…」と付け足す学生が散見された。

受講学生たちは2年次であり、前述した通りこれまでの教職課程での学習を通し特別なニーズをもつ子どもの発達支援における関係専門機関との連携の必要性についてある程度理解しているはずである。それでもこのような事例を提示されると、今日の前にいる子どもの状態を的確にとらえ、専門機関との連携も含めここで必要な支援は何かと考えるよりも、保育者として「自信を失う」〔4〕、「並行通園に対するネガティブな意識がのぞく」〔2〕、「母子関係のみに注目し自身と子どもの関係等は捨象」〔1〕など、感情的な反応を先行させてしまったと見受けられる学生が少なくないという結果が出た。もしも、以上のような感情をはっきり自覚せずに持ち続けたならば、Aへの援助を目的とする連携にどのような影響が現れると考えられるだろうか。

自信を失くすとは自分の保育の専門性に対してであるなら、他の専門性を有する専門機関と対等な関係で連携をすすめていくのは難しくなるだろう。自らの専門性を放棄してすべて専門機関でや

ってもらおうと“お任せ”状態になったり、専門機関からの助言等をうのみにし子どもへの関わりを主体的に考えられなくなるかもしれない。

また、相手機関に対しネガティブな意識を最初にもってしまふと、相手に関する何もかもが価値下げされてしまう傾向がある。心理学でいう初頭効果である。そうなってしまうと相手機関から提供されるどのような情報や助言、提案等も受け入れ難くなるかもしれない。「すぐに効果が出ない方法なんて役に立たない」「保育の現場を知らないからだ」等、批判的な見方ばかりが出てきて建設的な話し合いができなくなってしまう可能性がある。

そして、Aの状態について母子関係のみに原因を求めるのは、「訓練（療育）の日は泣かない」という事実の認識が欠落していることになる。なぜそのような見落としが起こるのであろうか？こうした錯誤行為の背景には何らかの無意識の働き（意図）があったとしたフロイトの言説 viii が思い起こされるが、この授業では、まずはそういった自身の感情的反応を経験しその存在に気づくことが目的であったので、それぞれ自身の感情が自己のどの部分が刺激されて（揺さぶられて）生じたものなのか、学生自身に省察させるところまではできていない。しかし、連携の実際場面で互いの関係性に関わる齟齬が起こった場合、問題にしななければならないのはこのレベルであろうと思われる。

もう1つ、さらに発展的な取り組み例を示す。保健医療福祉の「連携と統合」を教育理念とする埼玉県立大学では、4学科合同で専門職連携教育 Inter professional Education を実践し、その学習成果の検証を積み重ねている。そのうち2006年の報告 ix では、合同実習直後の学習効果を学生の自由記述文やインタビューの逐語録から抽出し、「利用者中心であること」「相互理解が重要であること」「自己理解が必要であること」の3点に集約されとした。さらに実習実施1年後の追跡調査で、ある学生は「自分を掘り起こすことが必要というのがメインだった」と語り、学習成果として「自己理解」がより強調された。だが、自分を掘り起こすことで得られると思われる「自分自身の洞察」などの記述は抽出されなかった、とも指摘している。

この指摘は、連携を通じて専門性や立場、枠組みなど自己と他者の違いに気づかされ、自己理解の必要性を痛感しても、「実際に理解する」さら

に「理解した内容を言葉で表現する」ことの困難さを示しているのではなかろうか。もちろん、上述の筆者が試みている1回の授業による学習だけでは到底達し得ない課題領域と考えなければならぬ。

### III 感情の問題という連携の困難性をどう乗り越えるのか

以上見てきたように、連携を通じて生じる個人のさまざまな感情は連携を阻害する要因になりうる。したがってその感情に個人本人が気づくことすなわち自己理解が必要であるが、自分で自分自身を「実際に」理解するのは大変困難であると推察された。では、どのようにすればこの“困難性”を乗り越えられるのだろうか。

精神分析家の藤山 x は、転移および逆転移について述べた文章の中で、「いま私は、人間の意識していない部分が必ずしもその個人の内部の『無意識』という場所にあるとは思っていない。それはかなりの部分、個人の外にある」と論じている。続けて、「その部分は、当面は、誰にも考えられないある種のできごととして、ふたりのあいだに具現するという形でしか存在しない」と断じる。ふたりとあるのは分析家と患者／クライアントを指し、精神分析という濃密な二者関係と同列に扱うのは乱雑に過ぎるかもしれないが、「無意識は『できごと』として具現する」、筆者はここに乗り越えの足掛かりがあるように思う。

自分で気づくことができないでいる感情に気づけといわれ自身の内面に意識を集中させてみても、それはまるで水を水で洗うがごとく無力感に落とし込まれるのがオチである。なぜなら意識をいくら集中しても、相手は「見えない」無意識なのだから。しかし、藤山のいう「できごと」なら他者との間で実際に起こっていることなので目で見える。音声も伴っているかもしれない。具現するとはそういうことだからだ。例えば、コーリィらが心理援助の専門家を目指す人のために書いたテキスト xi の中にある「自分自身の逆転移に気づくための兆候」リストにあげられているような「できごと」である。リストアップされた項目の一部を以下に示す。

・よく知らない人物なのに激しい怒りを覚えてし

まう。

- ・ある特定のクライアントがもうすぐ来ると思うと気持ちが昂ぶってしまう。
- ・あるタイプのクライアントに対しては、詳しい情報もないのにすぐにカウンセリングすることを断ってしまったり、他に紹介してしまったりする。 等

こうした、自身の内面でなく自分の外側で生じている「できごと」ならまだ気づくのは容易であろう。前節の筆者の授業事例で、Aへの援助を目的とする連携に与える影響の例を挙げたが、これらについてもまずは「そういうことが今、起きている」のだと認識しなければならない。そしてその状況をあらためて眺める。そもそもそれはどういうふうになったのか、その状況が生じた経緯（「できごと」の積み重ねである）を丁寧に辿り記録していく。文字にすることで、さらに外側から眺めなおすことができる。上司や同僚、スーパーバイザー等と話し合いができればなお良いだろう。結局はこうした地道な作業を繰り返すことでしか、自身の内面、自己理解には近づけないのではないだろうか。もつれた糸の結び目を目を凝らして探し、ひとつずつ解していくように、である。

おわりに

立場や役割の異なる専門職がさまざまな困難性を乗り越えてまで連携するのは、援助専門職個人の欲望を満たすためではなく、クライアント（援助対象者）に最善の援助を行うためであることはいうまでもない。河合 xii の言に戻ることになるが、「クライアントを中心に据えてよく考える」こと、すなわち感情の問題が生じた時もクライアントを中心に状況を見る姿勢を忘れてはならないだろう。

<引用文献>

- i 鍛冶谷 静 2011 「連携」の困難性について（1）  
四條畷学園短期大学紀要第44号 32-36
- ii 田中康雄 2007 特別支援教育の中で「学級経営・親対応・連携」をどう進めるか 児童心理 臨時増刊 864 特別支援教育「成功のカギ」学級経営・連携・親対応 2-11
- iii 河合隼雄 1998 家族・福祉・心理臨床 心理臨床の

実際1家族と福祉領域の心理臨床 総論第1章 金子書房

- iv 松木邦弘 2010 転移/逆転移-その概念の現在 臨床心理学第10巻第2号 176-180
- v 山中京子 2003 医療・保健・福祉領域における「連携」概念の検討と再構成 社会問題研究 .53? 1-22
- vi 栄セツコ 2010 「連携」の関連要因に関する一考察?精神障害者退院促進支援事業をもとに? 桃山学院大学総合研究所紀要第35巻第3号 53-74
- vii 土田 泰 2007 保護者、地域の支援者、教員の社会的背景に着目した協働への試み?長野県上田小県地域の自閉症乳幼児療育・保育施設から学校への就学をめぐる? 国立特殊教育総合研究所研究紀要 第34巻 129-151
- viii フロイト, S. 高橋義孝・下坂幸三訳 1977 精神分析入門(上) 新潮文庫
- ix 大塚真理子他 2006 卒業生にとっての4学科合同実習の学習成果~実施直後の調査と1年後の追跡調査から~ 埼玉県立大学紀要第8巻 97-104
- x 藤山直樹 2010 コラム... 熟達者が転移/逆転移を思う 情緒という他者-自分の情緒を相手にすること 臨床心理学第10巻第2号 239-240
- xi コーリィ, M. & コーリィ, J. 下山晴彦監訳 2004 心理援助の専門家になるために - 臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト 金剛出版
- xii 河合隼雄 既出(iii)

(2012. 3. 28 受稿, 2012. 3. 29 受理)